

後藤一美さんの思い出

鈴木, 佑司 / SUZUKI, Yuji

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / Review of law and political sciences

(巻 / Volume)

115

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

2018-03-20

後藤一美さんの思い出

鈴木佑司

最初の出会い

後藤一美さんとの出会いは、彼が『アジア経済』に発表した論文「援助行政に関する一考察」（一九七九年、vol. 20、no. 4）だった。それを読んだのは、丁度私が法政大学に奉職するようになった一九八三年だった。当時マレーシアから帰国して程ない時期であったこともあり、日本の東南アジア向けの援助に関心を持っていた。また、最初の著作『東南アジアの危機の構造』（勁草書房、一九八二年）がアジア経済研究所から開発研究奨励賞を授与され、翌年から東南アジア研究チームに参加させてもらい、彼について実務に携わりながら研究を進めている人材という紹介を、チーム長をされていた斎藤優（当時中央大学）先生からいただいた。そこで渡されたのが国際政治学会『国際政治』六四号（一九八〇年）であった。その中には後藤さんの円借款に関する実証的研究が掲載されていた。実務者で、シャープな議論をする人がいることに強い印象を持ったことを記憶している。

実際にお目にかかるのは私が日本平和学会の事務局長になった時である。会長は元カンボジア大使で広島大学教授となられた栗野鳳先生であった。一九八五年だったと記憶するが、平和学会の春の大会が京都の竜谷大学で開催されそこにゲストとして二人の非会員を招聘した。その一人が後藤さんであり、もう一人は朝日新聞社の田岡俊二氏であった。当時の平和学会は設立時の初代のリーダーたちから第二世代ともいうべき新しい研究者に世代交代が進みつつあり、理論研究とともにいわゆる地域研究者が続々と参加する新しい時代に差し掛かっていた。官庁やその研究機関、さらにはマスメディアからの参加者も増えていた。その意味で後藤さんの招聘は時機にかなっていた。実際、彼のバネルは多くの参加者であふれ、闊達な議論がなされた。いつか、時期が来れば、彼と一緒に仕事をすることになるかもしれないと感じたものだった。対途上国外交の共同研究を考えていたが、実際は後述するように全く違った協働になった。

二度目の出会い

しかし、その時期はなかなか来なかった。当時の法学部では政治学系は政治学科のみであり、しかも教員の定数は限られていた。殊に国際系は三名（国際政治学、アメリカ政治、中国政治）だった。私も専門の東南アジア政治を担当することはできず、国際政治学を担当していた。わずかに国際政治史を担当するソ連（ロシア）専門の下斗米さん、韓国政治専門の木宮さん（後に東大に転出、後任は権さん）が加わったに過ぎない。この状態が激変するのは一九九〇年代末からであった。丁度この時期は学部の再編成、特に教養部の改組転換が検討されていた。これとの関連で火急の課題はいわゆる二部、つまり夜間部の廃止への対応策であった。加えて、法学部の場合はロースクール開設とい

う新たな時代の変化への対応を迫られていた。かてて加えて、大学院、特に夜間大学院の開設（一部すでに実施）も検討され、いわば実務者への高度教育のニーズにこたえる必要にも直面していた。まさに、転換の時代であった。

転換にはいくつかの課題が絡んでいた。第一は、廃止される二部の学生定員を利用して政治学科をどう拡充するか、政治学科とは別に第三の学科、つまり国際政治学科を設置するかどうかであった。結論を先取りすれば、第三学科の新設となった。第二は、教養部の改廃により、第一教養部（昼）と第二教養部（夜）の教員の既存、新設学部への配置転換が行われることになり、法学部に割り当てられる教員を法律学科、政治学科、そして新設の国際政治学科にどう再配分するかであった。第三は、大学院に関しては定員の制約がない、つまり専任の大学院教員がない、換言すれば学部教員が大学院教員を兼任する制度の下で、政治学研究科の国際政治学専攻をどう設計するかであった。事務担当者を変えて新学科・新専攻設置準備委員会を組織して多角的で実際的な議論が延々となされた。無論、議論してばかりいたわけではなく、将来を見通して人事を先行させることを行った。その先行人事に「引っかけた」のが後藤さんであった。たまたま夜間大学院の開設についてはすでに触れたが、そこは比較的自由にカリキュラムを編成できる、つまり人事上の制約がないことが背景にあるので、相当思い切った編成をし、これ宣伝に努めた。その情報に「引っかけた」のである。一九九九年九月に後藤さんは法政大学法学部政治学科教員となった。まさに、人事の点でも、そしてカリキュラムの点でも、転換の担い手として、である。

実際に、二〇〇五年に国際政治学科が、そして二〇〇七年に国際政治学専攻が開設されるのだが、それまでの道のりは結構紆余曲折があったが、ここでは割愛する。ただ、以下の二点には触れておきたい。第一点は、二〇〇〇年の当初の段階で、関東地域には「国際」と名の付く学部、学科を要する大学は二〇余あり、我々にとって直近で参考になったのは二〇〇四年の早稲田大学政治経済学部の国際政治経済学科の新設であった。そして、二〇〇四年にはす

に文科省の設置審議会に届け出をし、認可されていたので、関東各地で新学科説明会を開催し、国際政治学科についても説明を行った。いずれの会場も想像を超える多数の父母が参加し、熱のこもった質疑があった。これはいけるという印象を持った。第二点は、新設の国際政治学科は定員を一三五名とし、一二名の教員を要する学科となった。わずか数名であった以前の国際系の集団とは全く異なった体制を整えられた。また、政治学科も加えると三〇〇名余の定員を要する大きな政治学系の大学となった。慶応、早稲田を除けばほぼ明治大学と匹敵するスケールとなった。

新設学科・新設専攻への共同作業

後藤さんとの本格的な仕事は新設学科・新専攻の企画とカリキュラム作成であった。こんなにも大学行政、学部・学科人事との絡みを考慮しなければならない仕事は、実務にありながら研究を遂行してきた彼には無理かと当初思った。しかし、これは私の完全な読み間違いで、うれしい誤算であった。さすがに実務経験者であるとも思った。的確で迅速な情報収集、分析、そして企画案作り、広報公聴、どれをとってもなくてはならない人材だった。

いくつか企画段階で直面した難題があった。その一つは、新学科の特徴づくりである。参加する教員の意見をできるだけ広く聞きながら設計しようとしたが、なかなか輪郭すら描けない日々が続いた。なるほど、こうした作業は教員のすることではないのかもしれないと思ったりした。しかし、かねてより「やる以上はしっかりやれ」という励ましを尊敬する松下先生からいただいた。また政治学科の先生方からも具体案を示せ、そうでないと議論できないというお叱りをいただいた。そこでひそかに後藤さんに私の腹案を説明し、誰も想像していないような、他の大学でも試みられていないような企画を作成することにした。無論数少ないが、長らく付き合ってきた友人たち、ロンドン

大学、カリフォルニア大学、さらにはオーストラリアのモナッシュ大学、タイのチュラロンコン大学など、からカリキュラムを送ってもらい参考にした。

これが国際政治学科に二つの科目群（グローバル・ガバナンスとアジア政治）を設けること、全員参加型のゼミ制度、そしてオックスフォード大学研修制度である。無論、内外で強い反対があることは予想していた。意外や意外、このコンセプトはすんなりと受け入れられた。事務サイドも、特に全員参加型ゼミとオックスフォード大学研修制度は「面白い」と言ってくれた。この事務の受け取りが背中を押してくれ、オックスフォード大学への現地折衝まで可能となったのは望外の成果であった。運もよかったのかもしれないが、かつて私の指導教授の一人であったJ・A・ストックウイン教授の紹介もあり、さらには法政大学卒業生でイギリスの大学との提携のビジネスを展開していた企業と組んで提携先、それも想像をはるかに超えた良きコレッジ（ユニバーシティ・コレッジ）を見つけ、契約にこぎつけることができた。やっと明るい展望が見えたと感じたものである。

二つ目はコンセプトを具体的な形にする、つまり詳細設計案を作成することである。これには人事と予算を考慮する必要がある、私の苦手とするところであった。幸い、この点で後藤さんは辣腕をふるってくれた。しかも彼独特のセンスで、というより学生目線に対する感受性の豊かさで、わかりやすく、かつ魅力的に見えるコピーすら自ら作成してくれた。加えて、我々が思い切ったカリキュラムを実施するのに欠かせない人材についても適切な提案をしてくれ、かつその手配もぬかりなく行ってくれた。かくて新設学科は魅力にあふれた教授陣がそろったこととなった。まさに、一番の難題と考えていた人事と予算に関して、ほとんど淀みなく、しかも事務折衝では次々に目標を実現していった。新学科、新専攻の設置に関しては彼の努力に負うところが大である。実際、文科省への設置申請にも付き合ってくれ、緊張して審査官に説明していた時も、常に横にいて支えてくれたことを昨日のように思い出す。結果はあ

っけないほどで、「問題はないですね」という答えを手にしたときは、正直キツネにつままれたような感覚を拭えなかった。

後藤さん——ベストティーチャ

二〇〇五年に開設、最初の学科主任となった私にとって、どんな問題にも相談に乗ってもらい、問題を解決し、そして着実な「夢の実現」に協力してもらった。後藤さんはまことに得難いパートナーであった。そのことは、反面、彼の人生の進路に大きな問題を与えてしまったのではないかと、この深刻な危惧を抱かせた。実務を経験し、多くの得難い体験を通して、援助の世界で大いに論客として活躍することを期待されていたこともあり、それを私がかくじいてしまったのではないかと、この心配であった。「仕事師」後藤のCZVを悪用したという非りである。ただ、矛盾するようだが彼はそんな「軟（やわ）」ではないとも思ったことも事実であった。それは彼の業績一覧にある通り、法政大学に來られてからぐんとペースが上がったように思われる。ある意味で、申し訳ないと思いつつ、救われた感じをした。

それ以上に驚いたのは、後藤さんが天性の「教師」であるという点である。良くも悪くも、良き研究者が良き教師であるとは限らない。むしろそうではないほうが一般的ではないだろうか。後藤さんが法政に來られた最初の時期、彼の授業ぶりをこっそりと拝見、拝聴したことが何度かあった。まるで世界銀行で発表をしているような鮮やかさ、それでいて学生に対する暖かな目線（それがわからないほど細目だが）、礼儀の厳しさ等々、なかなか新鮮な印象であった。さらには、彼のゼミでは一変、学生一人一人を徹底的に解体、再生させる凄腕「教師」ぶりであった。そこ

までコミットする教員はあまり見受けない。対面教育の大切さが提唱される今日の状況は、実は教員と学生の間関係が薄まり、弱まり、そしてますますヴァーチャル化していることの裏返しではないかとすら思えてならないからである。この点で、後藤さんがチャレンジしたのはこうした時代の流れに対する正面からの抵抗ではないだろうか。

法政に來られて一八年近い時間がたったと伺い、時間の経つ速さに驚きを禁じ得ない。この間に後藤さんの専門分野である援助の世界も大きな変化を遂げている。そしてまた、日本を取り巻く国際環境も激変している。さらに日本とアジアの諸国との関係もまた大きく変貌を遂げた。これらの点について、後藤さんがこれらの動きをどんな風に見ているのか、どんな将来を展望しているのか、日本の生き方をどう考えているのか、今後もこんな点にもその見識を示されることを大いに期待したい。ひょっとすると、後藤さんは、それは我らが育てた卒業生諸君に聞いてくれとおっしゃるかもしれない。にこっと笑いながら。それもまた、後藤さんらしくていいかなと思う。